

序

沖縄県の感染症診療は日本でもトップレベルにある。その理由の1つとして、沖縄県立中部病院が米国の古きよき医療を実践し、グラム染色、および血液培養を駆使した感染症の迅速診断という実績を築いてきたことがあげられる。また琉球大学大学院医学研究科感染症・呼吸器・消化器内科学（第一内科）においても、「感染症」を講座名の第一に掲げ、開院以来30年以上にわたってさまざまな感染症に関する診療、および研究を継続している。

このような背景の下、2013年5月に琉球大学大学院医学研究科感染症・呼吸器・消化器内科学（第一内科）の田里大輔医師が、「できる！見える！活かす！グラム染色からの感染症診断」というタイトルの書籍（羊土社）を出版した。この本は羊土社の「レジデントノート」誌に掲載されたグラム染色に関する連載を集積し、さらに加筆したものである。この本は、2013年の日本感染症学会総会で大変注目を集め、現在も好調な売り上げを維持している。

グラム染色が若手医師の興味を引くのは、顕微鏡の世界が目の前に明らかにされるからだと感じている。グラム染色にて起因菌を特定するという米国の古きよき時代の医療は、レジデントがグラム染色を実施することを Clinical Laboratory Improvement Amendments (CLIA, 臨床検査室改善法) が禁止している現在の米国では消滅した。また米国の医療現場では、医療費抑制目的に保険会社主導で各種ガイドラインを作成し、安価で画一的な治療を推奨している。起因菌を確定することなく、広域抗菌薬を選択する風潮には医療訴訟の多さも影を落としている。これらの結果として、わが国とは比較にならないほど、さまざまな耐性菌の増加を招いている。

グラム染色の単行本を出版させていただいた後に、「目で見える感染症」という企画が頭に浮かんだ。グラム染色の世界は美しい。しかし画像診断も面白いし、身体所見のみで診断可能な感染症も多々あることも事実である。

ただし「目で見える感染症」といっても、画像診断だけで何冊も本がまとまるし、また皮膚の所見だけでも厚い本が仕上がることとなる。そのため今回はすべてを網羅することを避け、比較的頻度の高い疾患を対象に、「目で見える感染症」を主題として編集させていただいた。症例の多くは、沖縄県で経験したものであり、主として琉球大学医学部附属病院、および沖縄県立中部病院の先生方にご執筆いただいた。もちろん多くの先生方がもっと印象的な画像をお持ちのことと思うものの、沖縄県の感染症診療のエッセンスの詰まった本書が少しでも皆様の参考になれば、編者として大きな喜びである。

2015年5月

編者を代表して

琉球大学大学院医学研究科 感染症・呼吸器・消化器内科学（第一内科）

藤田次郎